学生の自主性を尊重した部活指導の提案

大向 雅人*

Proposal of a Coaching Method in Club Activities Based on Student-Oriented Ideas

Masato OHMUKAI

ABSTRACT

A coach of a sport club in school generally plays an important role in giving club members technical or mental advice for improvement of skills. It is not educative for students only to get good results in games. The author is taking a let-alone policy in guiding members of the track and field club in Akashi College of Technology. It is reported in this article how educative the let-alone policy in the club is. When a member obtains a good result in games without any technical advice from his coach, he experiences the greater pleasure.

KEY WORDS: student-oriented ideas, educative guidance, track-and-field club

１．はじめに

中学校から大学に至るまで、学校においては放課後にクラブ活動がある。これは授業と並んで学校の重要な部分を占めていることは言うまでもない。学生たちは放課後にのびのびとクラブを楽しんでいることが多い。

クラブ活動の指導の仕方は学生の年齢によって様々である。高専は５年間の教育であり、高等学校とは異なって４、５年生がいるため、学校の雰囲気には大きな違いがある。そのためクラブ指導についても高等学校と同じように行うことが必ずしも好ましいとは言えない。また、クラブの種類によってもあるべき指導の仕方は異なることであろう。

本稿では明石高専の陸上部のクラブ指導を例にとり、学生に対して教育効果の高いクラブ指導の１つのあり方として，学生運営型の部活指導方法を提案する。クラブ活動は学生にとって授業において学ぶことのできない多くの事を身につけることのできる絶好の機会である。この教育的側面を重視したクラブ指導が学生に対していかに効果を発揮するかを中心に述べる。

*電気情報工学科

本論文で扱うクラブ指導はあくまでも教育指導の側面のみである。クラブ顧問はクラブの学生に対する安全管理、安全対策といった重要で不可欠な任務を背負っている。本論文はこれらの当然行うべき任務をも学生に任せてしまっていることを意味していないことを誤解のないよう申し添えておく。

２．陸上部の特質

陸上は水泳などと共に、数ある色々なスポーツの中で、タイムや距離等の記録を競うスポーツの１つであるため、サッカーやテニスなどのいわゆる対戦型スポーツと大きく趣が異なっている。また対戦型スポーツはチームで対戦するサッカー等のスポーツとテニスのように個人で対戦するスポーツとに分けて考えることができる。

個人で対戦する種目であると同時に記録を競うスポーツである陸上は、リレーを除けば練習は仲間を必要とせず自分一人ですることができ、団体で練習する必要性は特にない。しかしながら「クラブ活動といえば団体行動」という考え方も多く、陸上部といえども団体行動をしっかり取らせることに重点をおく顧問も少なくない。特に高等学校ではそうした傾向が強いよう

である。

３．高専の特質

高専では学校における色々な活動において４、５年生がリーダーシップを発揮している場合が多い。その一例としてクラブ活動では４年生がキャプテンになるケースが多い。クラブの練習では顧問の教員が現場で直接に指導する場合も少なくないが、キャプテンが中心となってクラブ全体の練習を引っ張っていく場合もよく見られる。特に、顧問の教員にそのスポーツの経験が全くない場合などその傾向が非常に強い。そして１年生から見れば４、５年生の上級生は落ち着いて見え、上級生を教員と間違えることもしばしばあるくらいである。したがって高専では４、５年生である学生がリーダーシップをとることは高等学校に比べると、よりやり易い環境であると言えよう。

高専においてクラブ顧問である監督はどのような役割を担っているのだろうか。本来、監督の役割は大きく２つが考えられる。１つはクラブを団体としてまとめることであり、もう１つは試合等でよい成績が得られるように技術的な指導を行うことである。特に団体競技の場合には試合の際などに選手個人には把握しづらい全体的な状況を把握することは監督の重要な役割といえる。顧問の中に経験者が全くいないクラブにおいては、こういった技術的な指導が実際問題、不可能である場合も少なくない。このような場合、高専では上級生がその役割を担うことになる。これは高等学校と大きく異なる所であろう。高専における上級生は単にリーダーシップを取るだけでなく、場合によっては本来顧問がやるべき監督の役割を担っている場合もしばしばあるといえる。

４．明石高専陸上部の場合

明石高専の場合、陸上部の顧問には陸上の経験者が全くおらず、技術的な指導は一切行なっていない。また、放課後の練習等の活動もキャプテンを中心に学生が自主的に運営を行なっている。顧問は大会出場の時の引率及び審判に集約されるといっても過言ではない。言ってみれば、顧問が顧問としての役割を果たしていないとも言えそうである。また、団体としての意識に関しても問題行動を起こさない程度に注意を与える程度で、特に団体としての認識を持つ必要性を求めるような指導は行なっていない。練習や大会参加などは自分の都合で決めさせており、学生側から見ればとても自由なクラブという印象が強いようである。チームワークを特に要求しているわけでもなく、練習には参加したい時に参加すればよいということもあって、他のクラブから途中で陸上部に移ってくる学生も時々見うけられる。ちなみに、この様なケースで、途中で入ってきた学生と元から陸上部にいる学生との間で摩擦が起こることは今まで全くなかった。

陸上の場合、最大の関心事は自己ベスト記録をいかに伸ばせるかにあると考えている。試合の結果は記録が全てを物語るだけに、すべての原因は自分自身にあることは自明である。つまり突き詰めて考えれば結局は自分自身との格闘なのである。結果はすべて記録という数字の形で表れるのであり、議論を差し挟む余地がない。記録を上げるために技術指導することは本来は顧問の１つの役割であるが、この点を学生に自主的に取り組ませることで、学生たちが自ら工夫して自分の記録向上に取り組んでいる。

実際の所、学生の自主性を尊重したこの考え方が逆に学生を大きく成長させるのである。例えば、学生の中には、どのような練習をしたらよいか悩む者がいる。こういった学生には中学校の時に先生に言われるがまま練習に一生懸命打ち込んできた場合が多く、ある意味では非常に優秀な学生ということができる。そのため高専に来て「どう練習すればよいか悩むことになるとは思いもよらなかった」と吐露することになる。このような類の経験、言いかえると自分でどう行動するべきかを自分自身で決めなければならない困難に遭遇すること、は特に彼らの年齢において非常に有益であると筆者は考えている。ある学生が卒業の時に文集に残していったものを匿名でここに紹介する。

「クラブ活動はとても楽しかった。というのが、私の今の素直な気持ちです。みんなで合宿をしたり、海に泳ぎに行ったり、大会で遠くへ行ったり、様々な楽しいことがありました。確かにそういうことも楽しかったけれど、別の意味での楽しさもありました。

練習の内容を自分で考え、お互いに意見を出し合って努力する。こういったことは、中学時代のクラブ活動では無い事だったし、普通高校に行っていたとしたら、多分経験できなかったことでしょう。自分たちにすべてが任されていて、とても不安な気分になった事もありました。当然甘えも生まれてきます。しかし、結果はすべて自分自身に帰ってくるのです。自分自身で考えた練習を、納得のいく形で終えられた時には、何とも言えない充実感を味わう事ができました。自分に厳しくある事が自分のためであるということも知りました。高専生活でのクラブ活動は、ある意味で学校

での生活よりも大きなものだったような気がします。

最後に、クラブ活動だけでなく、学校生活においても色々とお世話をしていただいた先輩の方々、そして、満足な指導もできなかった自分を支えてくれた後輩諸君に心から感謝します。」

学生の自主性を尊重した指導方法がいかに学生を成長させているかがこの文集に集約されていると言えよう。ちなみにこの学生は５年生の時に最終学年であるにもかかわらず黙々と練習に取り組んだ結果、三段跳びの種目において地区大会で優勝を果たしている。このようにして自分で自主的に取り組んで勝ち得た成果は何よりも得がたい喜びを与えてくれるのである。もちろん、このようなやり方が効を奏しているのは陸上部が個人競技であることが大きな要因であることは忘れてはならない。

５．学生を賞賛する事がやる気を引き起こす

明石高専陸上部で著者が技術指導をする代りとして何をしているのかについて述べよう。大会の引率の際には問題行動を起こさないように注意を与える程度で、大会の結果については特に何もコメントを与えないという方針をとっている。これは高等学校の陸上部の顧問が一般的にとっている指導方法とは大きく異なる点である。記録が良いか悪いか、またそれがなぜなのか、監督から言われなくとも自分が一番良くわかっているはずである、というわけである。

学生には自己記録を更新するようがんばることを第１目標とするように指導している。また、可能ならば、大会記録を塗り替える事を目指すように。プログラムの大会記録の欄に自分の名前が印刷されることを目指して。あるいはまた自分の好記録が新聞に載ることを目標に、とよく学生に言っている。

特に気をつけて行なうようにしていることとして、何らかの大会においてベスト８に入った場合などは、それが一目でわかるように決勝記録に赤でマーキングして翌日の早朝に学校の掲示板に大きく掲示している。朝登校して来る学生は掲示板でその速報を目の当たりにするのである。大会の結果が翌日の新聞に掲載された時にはその新聞のコピーを拡大して掲示する場合もある。この様な形で成果を挙げた学生をできるだけ賞賛するのである。また、大会結果が自分の家でとっている新聞に掲載されていない場合はその新聞を学生に記念にプレゼントすることにしている。こういった賞賛は学生にとりとても嬉しいことであり、このことによってより一層のやる気が生まれてくるのである。技術指導をしてもらって成果を挙げるより、何者にも頼らず自分で勝ち得た成果を大いに賞賛されるという方が喜び大きいのではあるまいか。

明石高専では恥ずかしい事に、10 年程前には陸上部員が少なく、春に毎週のようにある色々な大会にほとんど出場しないし、長期休暇には学校に出てきて練習する姿など全く無かった。ところが最近では長期休暇でも自主的に練習をやりに学校へ来るようになり、また著者が見逃していた大会を自ら見つけてきては出場を懇願するといったことが度々出てくるようになったりと、今では著者を含めて顧問がいわば振り回されているような状態になっている。2005 年度の高専地区大会で団体優勝を果たしてしまう結果となった。彼ら自らがつかんだ勝利であるほかはないのである。

６．さいごに

著者は，学生が自主的にクラブ活動を運営することによって得られる教育的効果は他では得がたいものであると考えている。スポーツと言えば「勝つ事」が最大の目標と考えがちである。勝つことはうれしいことではあるが、必ずしも教育的であるとは言えない。学生を成長させるためには自分で行なったことはすべて自分にはね返って来ることを実感できる機会が必要である。それもやらされているのではなく、自分の意思で取り組むことが重要だと考えている。

このようなことから、著者は学生のやる気を奮起させるべく、成果を挙げた学生の賞賛に徹している。具体的には、周りの人たちが部員にやる気を与えてくれるように、輝かしい成果を他の人達に知らせることを行っている。やる気を起こして自主的に取り組み成果を挙げていく、このプロセスこそが彼らにとって大切な経験であると同時に大きな喜びにつながるのである。本来なら、本指導法が学生にどれくらい満足度を与えているかについてアンケート調査を行い論拠を示すべきであるのだが、十分な信頼性を有するアンケート調査を行うことは簡単でなく実施できていないので、主観に頼った提案となったことをお許し願いたい。

最後にバレーボールや野球のようにチームワークが非常に重要となる団体競技では、チームのまとめ役としての監督の役割が不可欠であるため、学生の自主性を尊重した指導方法は実践しにくいかも知れない。